

# 「江戸前の海」よ再び



大野一敏さん

石油コンビナートが並び、貨物船が行き交う。こんな海に魚がいるのかと振り返ると、わが船の後ろでボラが跳ねている。

東京湾の真ん中に来た。

船は千葉県船橋市漁協の組合長、大野一敏(70)が操る大平丸。船上の「海洋教室」を見学しようと同乗したのだ。7月の日曜日、船は34人の小学生や保護者でにぎわっている。

「巻き網漁が始まるよ。よく見てね」。近くの2隻の小さな漁船から、ふわっと網が放られた。大野の長男、敏洋(45)が率いる小型巻き網漁だ。

取れたスズキやトビウオが大平丸の甲板に移され、子どもたちは触ったり抱いたり大はしゃぎ。バーベキューも楽しんだ。

「さわやかな運動だけど、東京湾の再生はこういうところから手をつけないとダメです」

大野家の先祖は江戸時代の漁師や網元という。18歳で父を継いで漁師になったが、そのころから東京湾は埋め立てが急速に進み、干潟が消えていく。魚は種類も数も減り、沿岸の漁協は次々に漁業権を手放した。

東京湾横断道路の計画が持ち上がると、大野は漁業への影響を心配して道路公園を訪ねた。でも門前払い。それならと出かけた米サンフランシスコで、目の覚める思いをする。

「日本はせっせと東京湾を埋

め立てる。向こうではサンフランシスコ湾の自然を守るために法律まで作っていたんです」

東京湾再生という大きな目標ができた。大野は三番瀬の保全運動に加わる。三番瀬は千葉県沖に広がる干潟で、埋め立て計画があったが、01年に堂本暁子(77)が千葉県知事になって白紙に戻した。大野は言う。

「三番瀬が残ったのは、東京湾を生かせたという天の声なんです。ここが死んだら湾が死ぬ」

東京湾を水中から見続けているのが、神奈川県横須賀市議の一柳洋(59)だ。昨年出版した「よみがえれ東京湾 江戸前の魚が食べたい!」のため、一昨年は70回潜った。夏場は汚れがひどく、数日しか潜れない。

生まれも育ちも横須賀港の深浦地区。海が遊び場だった。米軍用地の払い下げで工場ができたとたん、その海は汚れて泳げなくなる。「中学生だったけど、これは何だ、と思った」

工業高校を出て自動車整備の仕事をしたが、東京湾を記録

に残そうと水中写真を撮り始める。39歳で海洋ジャーナリストとして独立し、汚染を告発する「誰も知らない東京湾」を出版。91年の市議選で当選した。一柳は下水処理の改善に取り組む。雨が降ったあとの処理場で、下水がそのまま東京湾に流されているのに驚いてからだ。「調べたら、東京湾に面した処理場はどこも同じだった。かつては工場の排水、今は汚染原因の8割が家庭からの下水だ」

東京湾を囲む自治体の市議と「湾岸再生議員連盟」をつくらうと走り回っている。研究者も東京湾を見つめる。政策研究大学院大学教授の小松正之(56)は、水産庁の役人時代から東京湾にかかわってきた。水産総合研究センターで再生検討委員会に加わった時に、テーマにしたのが「江戸前の食文化」だ。

「すし、天ぷら、ウナギ。一般の人にも東京湾に関心を持ってもらおうと取り上げた。そして食文化が面白くなった。07年には「豊かな東京湾 甦れ江戸前の海と食文化」を刊行した。

出身は岩手県陸前高田市の広田湾に面した地域で、幼友達にも漁師が多い。「日本の漁村を元気に」と語る小松は、5年ほど前から民俗学者の宮本常一の本を読み返し、宮本の歩いた地を自分で回っている。

方々で見聞きた知恵も生かして、三番瀬の再生プランを練っているところだ。「半世紀かけて壊した東京湾、100年後を見すえた計画を示したい」

東京湾を思う口八丁手八丁のさむらいたち。まだ小川だが、やがて大河になって東京湾を清めるに違いない。

(高成田享)



① 一柳洋さん  
② 小松正之さん

